

キャリア発達を促す総合的な学習の時間の実践的な研究

－中学校と大学との連携を通して－

Practical Research of Integrated Studies for Career Development:
Through the Collaboration
between Junior High School and University.

濱保 和治

Kazuharu HAMAYASU

岡田 大爾

Daiji OKADA

『広島国際大学 教職教室 教育論叢』

“*Hiroshima International University Journal of Educational Research*”

ISSN:1884-9482

第9号 抜刷

Off Print of the 9th Edition

広島国際大学 心理科学部 教職教室

Issued by Hiroshima International University Teacher Education Unit

2017年 12月

December, 2017

キャリア発達を促す総合的な学習の時間の実践的な研究 —中学校と大学との連携を通して—

広島県 廿日市市立 野坂中学校 濱保 和治
広島国際大学 心理科学部 教職教室 岡田 大爾

要旨：平成23年の中央教育審議会答申では、社会に出る際に最低限必要なことや将来を考える際の土台となる意欲・スキルについて「基礎的・汎用的能力」として①人間関係形成・社会形成能力、②自己理解・自己管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力をあげているが、現在の中学校でのキャリア教育の現状をみると、職場体験学習やインターンシップなどの職場の体験的な活動や調べ学習、発表などが中心で、これらの能力の育成は十分とは言えない。本研究では、これらの能力を高めるために、中学生が大学授業の体験や大学施設の見学をしたりして、社会で活躍するために様々なことを学んでいる大学生の環境に触れさせることにより、自分の生き方を考える契機として社会貢献や職業選択のきっかけ、夢などの話題を提供するといったキャリア教育を行った。このように自分の将来設計の見通しと希望をもった進路を考える力や態度を養うことを目的とした授業を計画・実施し、キャリア発達にかかわる能力を育成する上での効果を検証した。その結果、学習態度・学習方略、解決意欲は向上したが、自己有用感は低下した。それを向上させるためには、事前の中学校・大学の綿密な連携と大学・専門学校側からの生徒への評価が必要である。

はじめに—問題の所在—

キャリア教育は、社会や職業に対する理解を深め、職業観や勤労観を育成するとともに、進路・職業の選択能力及び将来の職業人として必要な資質を形成することを目的としている。平成23年の中央教育審議会答申では、社会に出る際に最低限必要なことや将来を考える際の土台となる意欲・スキルについて「基礎的・汎用的能力」として①人間関係形成・社会形成能力、②自己理解・自己管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力の4つの能力に整理されている(*1)。しかし、現在の中学校でのキャリア教育の実施状況をみると、その取組は職場体験学習やインターンシップなどの体験的な活動や調べ学習、発表などが中心で、これらの能力の育成は十分とは言えない。また、進路指導における主体的選択能力を育成するために、生徒が情報を選択し、自ら選択・決定することは重要である。しかし、キャリア教育において実際には生徒が選択・決定する機会が少ないのが現状である。

そこで、本研究では、これらの能力を高めるために、中学校と大学との連携によって中学生が大学授業の体験や大学施設の見学をしたりして、社会で活躍するために様々なことを学んでいる大学

生の環境に触れさせることにより、自分の生き方を考える契機として社会貢献や職業選択のきっかけ、夢などの話題を提供するといったキャリア教育を行った。このように、自分の将来設計の見通しと希望をもった進路を考える力や態度を養うことを目的とした授業を計画・実施し、キャリア発達にかかわる能力を育成する上での効果を検証した。

1. 研究方法

- (1) 中学生の実態を調査し、キャリア発達にかかわる能力について、生徒の学習行動を規定する潜在的な要因を抽出し、基礎的・汎用的能力との関係を整理する。
- (2) 総合的な学習の時間において大学・専門学校等訪問する体験学習を実施し、事前・事後の調査から、キャリア発達にかかわる能力を育成する上での効果を検証する。

2. 研究内容

2.1 キャリア教育を通して育てる能力

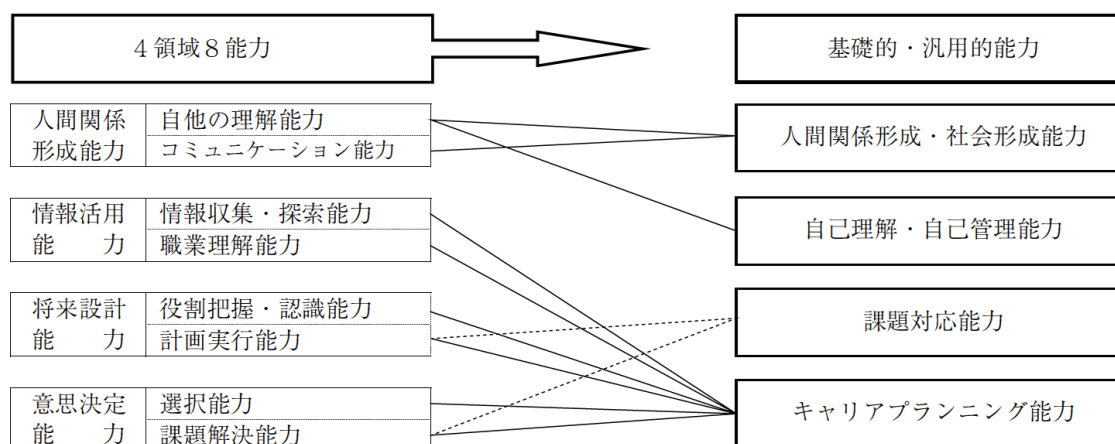
平成 14 年 11 月に国立教育政策研究所生徒指導研究センターは、「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」の調査研究報告書をまとめ、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）－職業的（進路）発達にかかわる諸能力の育成の観点から－」を提示した。この報告書では、「職業観・勤労観」の形成に関連する能力として、「4 領域 8 能力」を示した（表 1）(*2)。

表 1 キャリア発達にかかわる諸能力（4 領域 8 能力）「例」

4 領域	8 能力
「人間関係形成能力」	自他の理解能力, コミュニケーション能力
「情報活用能力」	情報収集・探索能力, 職業理解能力
「将来設計能力」	役割把握・認識能力, 計画実行能力
「意思決定能力」	選択能力, 課題解決能力

しかし、「4 領域 8 能力」は、生涯にわたってキャリア発達を支援していくという視点が十分ではなく、高等学校段階までの提示にとどまっている。また、「例」として示されたにもかかわらず、多くの学校では、職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）において育成することが期待される能力・態度の文章をそのまま引用する等学校や地域の特色や生徒の実態等を前提としない固定的・画一的な運用が目立つようになった。

そこで、「4 領域 8 能力」の見直しが進められ、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（平成 23 年 1 月）(*3)の中で「基礎的・汎用的能力」が示された。この「基礎的・汎用的能力」は、①人間関係形成・社会形成能力、②自己理解・自己管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力からなり、従来の「4 領域 8 能力」との関係は図 1 に示すとおりである。



※図中の破線は両者の関係性が相対的に見て弱いことを示す

図1 4領域8能力と基礎的・汎用的能力の関係

「基礎的・汎用的能力」は、キャリア発達にかかわる諸能力が生涯を通じて必要であることを考慮して、「4領域8能力」を再構成したものである。そのため、学校の教育活動においてキャリア教育を考える場合には、「4領域8能力」をとおして考える方がより具体的であると思われる。

しかし、キャリア発達にかかわる能力を測定することを考えた場合、より具体的な学習行動や態度などの尺度を考える必要がある。

2.2 中学生のキャリア発達にかかわる能力の実態調査

中学生のキャリア発達にかかわる能力、「基礎的・汎用的能力」を調べるために、高知県立教育センター作成（平成25年12月）の「キャリア形成に関するアンケートの項目及び構成因子（小中学校版）」を参考に質問紙（事前調査）を作成した。質問項目は、表2のように分類される。

表2 基礎的・汎用的能力の実態調査

	質問項目番号
人間関係形成・社会形成能力	1, 2, 3, 4
自己理解・自己管理能力	5, 6, 7
課題対応能力	8, 9, 10, 11, 12, 13, 14
キャリアプランニング能力	15, 16, 17

事前調査は、4段階評定尺度法で、平成28年7月野坂中学校3年生132名に対して実施した。
（7月調査）

キャリア形成にかかわるアンケート（事前）

3年組 番氏名（ ）

◇ このアンケートは、あなたがこれからの進路や将来の仕事について、普段どのように考えているかを知り、適切なアドバイスなどに生かすためのものです。あなたの日頃の学習や生活のようすを振り返って、当てはまる番号に○をつけてください。（4・・・当てはまる 3・・・どちらかといえば当てはまる 2・・・あまり当てはまらない 1・・・まったく当てはまらない）		
1	わたしは、地域の活動（季節の行事や地域のそうじなど）に参加している。	4 3 2 1
2	わたしは、人の役に立つ人間になりたいと思う。	4 3 2 1
3	わたしは、学校の授業で学んだことは、将来、仕事や生活で役に立つと思う。	4 3 2 1
4	わたしは、近所の人に会ったときは、あいさつをしている。	4 3 2 1
5	わたしは、場に応じて、ていねいな言葉をつかうことができる。	4 3 2 1
6	わたしは、規則、ルール、約束を守っている。	4 3 2 1
7	わたしは、自分には、よいところがあると思う。	4 3 2 1
8	わたしは、失敗しても、もう一度、挑戦している。	4 3 2 1
9	わたしは、失敗をした際には、なぜ失敗をしたのか、ふりかえるようにしている。	4 3 2 1
10	わたしは、わからないことや知りたいことがあるとき、進んで調べたり、だれかに質問したりしている。	4 3 2 1
11	わたしは、難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦している。	4 3 2 1
12	わたしは、身近な人や、さまざまな分野で活躍している人の姿から学ぼうとしている。	4 3 2 1
13	わたしは、わからないことや知りたいことがあるとき、どのように調べるとよいか理解している。	4 3 2 1
14	わたしは、自分なりに勉強の仕方を工夫している。	4 3 2 1
15	わたしは、将来の夢や目標を持っている。	4 3 2
16	わたしは高校生になって、積極的に取り組んでみたいことがある	4 3 2 1
17	わたしは、自分はどんなことが得意であるか知っている。	4 3 2 1

図2 作成した質問紙調査

調査結果について因子分析法（バリマックス回転）を用いて分析を行い、自己有用感・目的意識、学習態度・学習方略、解決意欲、社会性の4つの因子（F1～F4）を得た。（表3）この4つの因子を視点として生徒のキャリア形成にかかわる意識を分析した。図中の太枠は、因子負荷量絶対値0.41以上を示しており、これを基準として因子名を解釈した。

表3 因子分析表

項目内容/因子	F 1	F 2	F 3	F 4	二乗和	寄与率
F 1 : 自己有用感・目的意識					2.935909	17.27%
16.わたしは、高校生になって、積極的に取り組んでみたいことがある。	0.60072	0.26502	0.173886	0.125045		
4.わたしは、近所の人に会ったときは、あいさつをしている。	0.565512	0.106378	0.026893	0.263041		
7.わたしは、自分には、よいところがあると思う。	0.520587	0.133316	0.424649	0.151137		
3.わたしは、学校の授業で学んだことは、将来、仕事や生活で役に立つと思う。	0.519843	0.223893	0.393044	0.0015227		
17.わたしは、自分はどんなことが得意であるか知っている。	0.482356	0.309732	0.227739	0.097026		
2.わたしは、人の役に立つ人間になりたいと思う。	0.471479	0.218706	0.234159	0.093035		
15.わたしは、将来の夢や目標を持っている。	0.468629	0.34508	0.094076	0.181044		
1.わたしは、地域の活動(季節の行事や地域のそうじなど)に参加している。	0.418936	0.080492	0.128566	0.133229		
F 2 : 学習態度・学習方略					2.549979	15.00%
14.わたしは、自分なりに勉強の仕方を工夫している。	0.131569	0.725318	0.045335	0.195353		
12.わたしは、身近な人やさまざまな分野で活躍している人の姿から学ぼうとしている。	0.324609	0.613593	0.256356	0.012369		
9.わたしは、失敗をした際には、なぜ失敗をしたのか、ふりかえるようにしている。	0.255246	0.548236	0.479505	0.236255		
8.わたしは、失敗しても、もう一度、挑戦している。	0.431301	0.51362	0.335861	0.172348		
11.わたしは、難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦している。	0.423162	0.480116	0.261739	0.165379		
F 3 : 解決意欲					1.847286	10.87%
10.わたしは、わからないことや知りたいことがあるとき進んで調べたり、だれかに質問したりしている。	0.294546	0.19175	0.681624	0.280871		
13.わたしは、わからないことや知りたいことがあるときどのように調べるとよいか理解している。	0.166335	0.551711	0.566154	0.118261		
F 4 : 社会性					1.163517	6.84%
5.わたしは、場に応じて、ていねいな言葉をつかうことができる。	0.21838	0.159538	0.167153	0.7326		
6.わたしは、規則、ルール、約束を守っている。	0.385842	0.259105	0.239479	0.45414		

表4は事前調査の結果について各因子の質問項目毎に肯定的回答(4と3)の割合を示したものである。

表4 事前調査の結果

因子名	質問項目	肯定的回答の割合
自己有用感・目的意識	16.わたしは、高校生になって、積極的に取り組んでみたいことがある。	76.5%
	4.わたしは、近所の人に会ったときは、あいさつをしている。	87.9%
	7.わたしは、自分には、よいところがあると思う。	69.7%
	3.わたしは、学校の授業で学んだことは、将来、仕事や生活で役に立つと思う。	90.2%
	17.わたしは、自分はどんなことが得意であるか知っている。	72.7%
	2.わたしは、人の役に立つ人間になりたいと思う。	94.7%
	15.わたしは、将来の夢や目標を持っている。	86.4%
学習態度・学習方略	1.わたしは、地域の活動(季節の行事や地域のそうじなど)に参加している。	43.2%
	14.わたしは、自分なりに勉強の仕方を工夫している。	62.9%
	12.わたしは、身近な人や、さまざまな分野で活躍している人の姿から学ぼうとしている。	75.0%
	9.わたしは、失敗をした際には、なぜ失敗をしたのか、ふりかえるようにしている。	71.2%
解決意欲	8.わたしは、失敗しても、もう一度、挑戦している。	81.1%
	11.わたしは、難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦している。	58.3%
	10.わたしは、わからないことや知りたいことがあるとき、進んで調べたり、だれかに質問したりしている。	71.2%
社会性	13.わたしは、わからないことや知りたいことがあるとき、どのように調べるとよいか理解している。	66.7%
	5.わたしは、場に応じて、ていねいな言葉をつかうことができる。	96.2%
	6.わたしは、規則、ルール、約束を守っている。	94.7%

表4について、肯定的回答率が70%以下の項目を見てみると、「地域との関わり」(質問1)を除くと、「自己肯定感」(質問7)、「勉強法の工夫」(質問14)、「失敗を恐れない」(質問11)、「調べ方

の理解」(質問 13) が低い数値である。

さて、表 3 で導出した 4 因子と表 2 の基礎的・汎用的能力の関係を見てみると、次の表 5 のように整理できる。表 5 の左側にあげられる 17 の設問が示す学習行動について、因子分析を行った結果 4 つの因子を抽出でき、その 4 つの因子が生徒の学習行動の要因になっていると考えられる。つまり、基礎的・汎用的能力の内容として 4 因子の内容が基盤となっていると考えることができる。

表 5 実態調査の 4 因子と基礎的・汎用的能力の関係

基礎的・汎用的能力	設問番号	矢印の太さは関係の数を表す	4 因子	設問番号
人間関係・社会形成能力	1	→	自己有用感・目的意識	16
	2			4
	3			7
	4			3
自己理解・自己管理能力	5	→	自己有用感・目的意識	17
	6			2
	7			15
	8			1
課題対応能力	9	→	学習態度・学習方略	14
	10			12
	11			9
	12			8
	13			11
	14			10
	15			13
キャリアアップランニング能力	16	→	解決意欲	5
	17			6

今回の実態調査の結果である表 4 について、基礎的・汎用的能力を表 5 の 4 因子の内容に基づいて考察すると、「地域との関わり」(質問 1) を除くと、「自己肯定感」(質問 7)、「勉強法の工夫」(質問 14)、「失敗を恐れない」(質問 11)、「調べ方の理解」(質問 13) の肯定的回答率が 70%以下であるということは、生徒の実態は「自己有用感・目的意識」「学習態度・学習方略」「解決意欲」に課題があると解釈することができる。

2.3 中学生のキャリア発達につながる大学・専門学校訪問の実施

平成 23 年 1 月中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方」においても、中学校では「社会における自らの役割や将来の生き方・働き方等を考えさせ、目標を立てて計画的に取り組む態度を育成し、進路の選択・決定に導く」ことと示され、自らの意思と責任で決める力の育成が求められている(*4)。しかし、主体的に選択・決定していく力を育成する場合、生徒自らが物事を選択・決定する場面をどのように設定するかということが必要となる。もうひとつ、生徒自らが物事を選択・決定する際に、どのような情報を選択するかということは重要である。しかし、中学から高校に進学する際には、ほとんどが普通科のため、実際に具体的な職業を強く意識して高等学校選びを行っている生徒は少ない。しかし、大学では、ほとんどが就職に向けて自分の長所ややりがいを見つけ、具体的な自分の将来の方向に向けて資格や実力を伸ばす必要があり、さらにその長所をもとに企業等に働きかけなくてはならない。このような環境は、生徒が自分の進路選択の視野を広げ意識を高めるために適していると考えられる。そこで、生徒の主体的な選択能力を高めるために、総合的な学習の時間において大学・専門学校等への訪問を計画し、実施した。

3. 検証授業の実施

次のような学習計画のもとで、生徒に大学・専門学校等の訪問先を選択させ、調べ学習を行い、体験学習を実施した。

(1) 大学・専門学校等訪問のねらい

- ・「キャリア教育」の一環として、総合的な学習の時間における「生き方学習」として行う。
- ・大学・専門学校等での学習の体験等を通して、自分の将来設計の見通しと希望をもった進路を考える力や度を養う。
- ・自ら課題を持って大学・専門学校等について調べたり、実際に体験したりするとともに、見学・体験を行い、学んだことをまとめる力を養う。

(2) 日時 平成26年8月26日(火) 8:15~16:00

(3) 訪問先

- ① 広島工業大学
- ② 広島工業大学専門学校
- ③ 日本赤十字広島看護大学
- ④ 広島酔心調理製菓専門学校
- ⑤ 岩国短期大学
- ⑥ 広島修道大学

(4) 対象学年 第3学年 143名 (男子65名, 女子78名)

生徒の希望をもとに、各訪問先を20名程度になるように調整する

(5) 学習内容 個人で課題を持って、各大学や専門学校を訪問し、体験授業や学校の施設を見学したり、各大学や専門学校の学校生活を体験したりさせていただく。また学習の形態や卒業後の進路などについての話を聞く。

(6) 学習計画

① 事前学習

- ア 大学・専門学校等訪問についての目的・内容・方法について理解する。
- イ 訪問学校別のグループに分かれて当該学校についての理解を深める。
- ウ 訪問校について知りたいことを整理する。

② 学校訪問の実施

③ 事後学習

- ア 各校へのお礼状を作成して送る。
- イ 各校で学んだことや知り得た情報を整理し、レポートにまとめる。

4. 検証授業の分析

検証授業の後にキャリア形成かかわるアンケート調査(事後調査)を行った(9月調査)。7月調査と9月調査の結果の比較から、次の分析を行った。表6に調査結果の肯定的回答の割合の比較を示す。

表6 事前・事後調査結果の比較

	質問項目	事前	事後	差	平均差の検定
自己有用感・目的意識	16.わたしは、高校生になって、積極的に取り組んでみたいことがある。	76.5%	80.5%	3.9%	
	4.わたしは、近所の人に会ったときは、あいさつをしている。	87.9%	88.0%	0.1%	
	7.わたしは、自分には、よいところがあると思う。	69.7%	66.9%	-2.8%	
	3.わたしは、学校の授業で学んだことは、将来、仕事や生活で役に立つと思う。	90.2%	87.2%	-2.9%	5%有意
	17.わたしは、自分はどんなことが得意であるか知っている。	72.7%	80.5%	7.7%	
	2.わたしは、人の役に立つ人間になりたいと思う。	94.7%	91.7%	-3.0%	
	15.わたしは、将来の夢や目標を持っている。	86.4%	80.5%	-5.9%	
	1.わたしは、地域の活動(季節の行事や地域のそうじなど)に参加している。	43.2%	39.1%	-4.1%	
学習態度・学習方略	14.わたしは、自分なりに勉強の仕方を工夫している。	62.9%	71.4%	8.5%	
	12.わたしは、身近な人や、さまざまな分野で活躍している人の姿から学ぼうとしている。	75.0%	81.2%	6.2%	5%有意
	9.わたしは、失敗をした際には、なぜ失敗をしたのか、ふりかえるようにしている。	71.2%	74.4%	3.2%	
	8.わたしは、失敗しても、もう一度、挑戦している。	81.1%	80.5%	-0.6%	
	11.わたしは、難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦している。	58.3%	68.4%	10.1%	5%有意
解決意欲	10.わたしは、わからないことや知りたいことがあるとき、進んで調べたり、だれかに質問したりしている。	71.2%	73.7%	2.5%	
	13.わたしは、わからないことや知りたいことがあるとき、どのように調べるとよいか理解している。	66.7%	73.7%	7.0%	5%有意
社会性	5.わたしは、場に応じて、ていねいな言葉をつかうことができる。	96.2%	94.7%	-1.5%	
	6.わたしは、規則、ルール、約束を守っている。	94.7%	92.5%	-2.2%	

表6について、事前調査で課題となった「自己肯定感」(質問7)、「勉強法の工夫」(質問14)、「失敗を恐れない」(質問11)、「調べ方の理解」(質問13)について見ると、「自己肯定感」は-2.8%、「勉強の工夫」は8.5%、「失敗を恐れない」は10.1%(5%有意)、「調べ方の理解」は7.0%(5%有意)の変容であった。また、それ以外に「3.授業の有用性」が-2.9%(5%有意)、「12.他から学ぶ姿勢」が6.5%(5%有意)の変容があった。

総合的な学習の時間において大学や専門学校等訪問を実施したことにより、学習態度・学習方略、解決意欲は向上したのは、複数の大学・専門学校等から選択し、調べ学習を行うという場面で、必要感を持ったことや解決方法を身につけたことで、学習態度・学習方略(「勉強の工夫」)、「12.他から学ぶ姿勢」(「失敗を恐れない」)、解決意欲(「調べ方の理解」)が向上したと考えられる。生徒は大学や専門学校から提供されるガイドブックやパンフレットを読んで、内容をまとめ、疑問点をもとに質問項目を作成し、それを大学・専門学校に送るなど事前の調べ学習に熱心に取り組んだ。そのことが原因で、学習態度・学習方略、解決意欲は向上したと考えられる。

また、自己有用感(「自己肯定感」と「授業の有用性」)の低下は、大学・専門学校等と社会とのつながりが複雑であり、理系・文系といった一つの判断基準だけでは選択できないことを知ったり、多様な学問や進路があることを知ることで、学校の授業で学んだことや自分自身に自信をなくしたり迷いを生じたからではないかと考えられる。さらに、当日の大学・専門学校の学習内容が完全に理解できず、大学・専門学校の指導者からの評価がなかったため、正しい自己評価ができず、自分のことを低く評価してしまい、自己有用感が低下したのではないかと考えられる。

おわりに—まとめに代えて—

今回の大学・専門学校等訪問を実施してみて、学習態度・学習方略、解決意欲は向上し、自己有用感は低下したと考えられるが、次の点が今後のキャリア教育に生かせると考えられた。

- ① 日々の教育活動で、どれだけ進路について主体的に考える機会を設定でき、生徒に必要感を持たせることができるかということである。今回の大学・専門学校等訪問では、限られた範囲ではあるが、大学・専門学校等を選択し、調べ学習なども設定できた。生徒は、大学・専門学校の学習内容をまとめ、疑問点をもとに質問項目を作成し、それを大学・専門学校に送るなど事前の調べ学習に熱心に取り組んだ。そのことで、学習態度・学習方略、解決意欲を向上させることができた。
- ② 単に見学したり体験したりするだけの学習にとどまらず、探究的な学習を合わせて行うことで自分の頭で考えながら学ぶことと実際の社会の中での学びのつながりを意識させることができるということである。しかし、総合的な学習の時間の学びには有用感を感じても、日々の授業での学びには感じないという事にも留意する必要がある。職場体験では、実際に社会に出てから必要な力である挨拶や礼儀、コミュニケーション能力等を直接経験し、その結果どの程度の力が身についたかという評価を事業所より評価されるが、大学・専門学校では、中学・高校での教科を中心とする学習を基礎として、社会で活躍するために様々なことを学ぶところであり、中学校で学んでいる各教科や総合的な学習が役立つ事が生徒に実感されにくい。そこで、事前の連携で、中学校での学習が大学・専門学校でも必要なことを中学生にもわかりやすく説明してもらう必要がある。また、当日の体験学習について、体験学習の指導者から直接評価してもらえれば、生徒の自己有用感も高めることができるのではないかと考えられる。

引用文献

- (*1) 文部科学省，中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」，2011
- (*2) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター，「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」の調査研究報告書，2002
- (*3) 高知県教育委員会，「キャリア形成に関するアンケートの項目及び構成因子(小中学校版)」，2014
- (*4) 文部科学省，中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」，2011
- (*5) 文部科学省，中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」，2011